

## わくらば

高田 友

大堰川井堰の水のわくらばに今日は待めし暮にやはあらぬ

(新古今 藤原元輔)

傳聞したる所なれど、高校生をしてこの歌を解釋せしめたるに、左の如くに申したりと。

大堰川の水の淀める淵に病葉の浮きつ漂ひつするを見たり。ああ、今日こそは川の畔にかの麗しき女性との邂逅あらめと待ち遠にして、病葉に願を掛けて待ちあたるに、日落ちて君つひにおはしませず。已哉。

よくぞかくも荒唐無稽なる誤譯のあるべき。歌一首を解釋するに五に過ぐる過ちを犯したりとは。

まづ第四句なれど、「たのみし」(A)ならで「たのめし」(B)なるに留意せざるべからず。

「たのみし」の「たのみ」(A)は四段活用「たのむ」(A)の連用形にて、現代語の「たのむ」に近し。然則、「たのめし」にあらで「たのみし暮」と言ひたらんには、右高校生の申し條正鵠を射たりと言ふも得べし。

「たのめし」の「たのめ」(B)は下二段活用「たのむ」(B)の連用形なり。而して、四段の「たのむ」(A)は自動詞、下二段の「たのむ」(B)は他動詞。「よこたはる」と「よこたふ(よこたへる)」、「すわる」と「すう(すゑる)」に同じく、母音交替に據りて、自動詞・他動詞の對立を表出したるなり。(右四つの動詞、英語にては lie, lay; sit, set/seat。これまた母音交替に據りて自動詞・他動詞の變換をす。天の配剤奇異なりと言はざるべけんや)

下二段「たのむ」(B)は現代語「たのませる」と解して大過なし。特に妹背の間に、男、女に向ひて、「今日は必ず君を訪ひて一夜をとものにすべし。ゆめ疑ひたまふなかれ」との謂ひなり。俗なる譯を施せば「あてにさせる」ならんか。

「たのむ(四段)」(A)を trust him に比定すれば、「たのむ(下二段)」(B)はすなはち make her trust him となむ言ひつむ。

この歌に於ては、「君、妾わらはに『汝が家を訪れむ』と宣ひしは今宵にあらずや。あてにさせて待たせたるに夜更けて音沙汰なし。ああ、輕薄の人なるかな」と恨みたる歌なり。

平安の世には、男、女の家を訪ねて契りを交すが常なり。すなはち「待つ」の語あれば、大方は女の歌と斷じて誤たざるべし。

「詠み人は清原元輔(清少納言の父)。男の歌なり」と鬼の首を取りたるが如くに誹謗したまふなかれ。元輔男にして、縦令男たるは罪ならんとも、その責は元輔こそ負ふべけれ、何爲なんすれぞこもと爰元の所爲なりならんや。

平安の和歌には、男、女の身になりて作りたる歌、寔に多し。就中、西行・定家の戀歌は過半これに當るといふを得べし。これが大堰川の歌も、清輔、自らを女になぞらへて歌ひたるなり。

因みに、小倉百人一首・藤原定家の「來ぬ人を松帆の浦の夕風ゆふかぜに焼くや藻鹽あわしほの身も焦がれつつ」も亦、「來ぬ人を待つ」と言ひたるによりて、女の身になりたる歌なること瑩えいらかなり。

さて、今一つ、この歌の重大なるポイントあり。

「わくらば」は「病葉」の外に、「まれに・たまさかに」なる副詞の意ありて、此處は正しくさなり。常はつれなき男の「今日は待みて待たれよかし」(この「待み」はA)と言ひたるによりて、女、欣喜雀躍、菓子など取り繕ひて、待ちゐたるに、案に相違して糠喜びとぞなれりける。

「わくらば」には兩の義あるを忘るべからず。

しからば、「大堰川井堰の水の」は何の謂ひぞ。「水に浮かべる病葉」にはあらで、「水の湧く」（泉などの如く水の湧出するを言ふ）といふによりて、「わくらば」の「わく」を引き出す序詞なり。豈、清輔の傑作にあらずや。

この歌、「病葉」とは些かのかかはりもなし。また、「大堰川」は歌枕に過ぎず、別段と月橋げつけうの欄干らんだんに凭たよりて水面みづのを眺めつつ、長閑ながめしたるにはあらざるなり。

古今集・中納言行平に名高き「わくらばに」の歌あり。

わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽垂れつつ侘ぶと答へよ  
行平、思ふ所ありて、須磨に籠りてありし時、都の知己に送りたる歌。

「たまさかに、行平いづこにかあると問ふ人あらんには、須磨の浦にて藻鹽の水を垂らしつつ詫び住ひをしてありと答ふべし」との義にて、源氏物語須磨にてもこれを引きて褒むるあり。

「わくらば」に「病葉」を宛つるの由來は定かならず。

一説には、「わくらば」を「病葉」に宛てたるは、小林一茶の俳句が初出にて、「わくら葉のしんぼづよくはなかりけり」に始まると言へり。

然而、萬葉集に既に例ありとの異説もありて、左の歌をその証左とす。

玉に貫き消けたず賜らむ秋萩の末うれ々良葉に置ける白露

「々」は「久」の書寫の過ちにて、「和久良葉」すなはち「わくらば」とこそは唱へらるれ。

「秋萩の梢に赤き病葉あり。上に置いたる白露しらつゆけぎや氣爽きさうかなること玉の如し。心してな消しそ。穿ちて絲を通し、頸飾けいしやくと爲して、我に賜はれかし」と歌ひたれば、怕るらくは、妹の背に戯れてねだりたるにあらずや。

「病葉」とは、變色したる葉の義なれど、紅葉もみぢにはあらず。夏の青葉に混じりて赤らみたる葉を言ふ。げに「病に衰へたる葉」なり。語源は諸説あれど、「赤らむ葉」の轉じて「あかるば」、さらに訛りて「わくらば」とぞ變じたるといふが有力なり。

而して、「病葉」は青葉の中に稀に、たまさかに混じる異物なれば、それより轉じて、「稀に・たまさかに」の義の副詞生じたりと唱へらる。

これに對して、異説あり。上古中世には「病葉」の意の「わくらば」は、右の「秋萩の」を除きて用例稀なるによりて、眞實一茶に至りて漸く詠まれたるにあらずやと言ふ。愉快なる説は、清輔の名高き右「大堰川」の歌にて、「水面に浮きたる病葉に願ひを掛く」なる誤解生じ、かつは「わくらば」の「ば」にて終はるによりて、「葉」を宛てて、誤用の生じたりとの由。

はたまた、平安公家の日記に「わくらば」を「稀・たまさか」と「病葉」との掛詞にしたる珍奇なる歌あり。

侍むれば今日松枝のわくらばに相ひ見し人をえやは忘れむ

「侍めば」(A)ならで「侍むれば」(B)なれば、下二段にして、「宛にさせる」の義。男の今日來むとて宛にさせたるによりて、「今日待つ」なり。而して、「待つ」を「松」に掛けて「松枝」。松枝に病葉ありとて「松枝のわくらば」。その「わくらば」を「たまさか」の意に轉じて、「たまさかに見るつれなき人、やはか忘るるを得べき」と嘆きたるなり。

如此、語句を導き出さんがための前置き、此處にては「恃むれば今日松枝の」をこそ、「序詞」とは言ふなれ。解説書に必ず説かるる所なれど、この歌の歌意は「わくらばに相ひ見し人をえやは忘れむ」に凝縮せられてあり。

「えやは忘れむ」は「え忘る」(can forget)、「え忘れず」(cannot forget)の反語。

「君、今日は來むとて契りたまへば、待ち遠にして夜を明かしつれど、つひに松枝の病葉のおとづれだに聞ゆるなし。君に會ふことかくは稀なり。ああ、つれなき人を忘れぬの條、なんぞ口惜しからざる」との義なるべし。

この歌、口調も巧みなれば、推奨すべきの作なり。珍奇なれど、傑作と言ふべきにあらずや。君、諳誦せられよかし。